

入江神社(長崎県対馬市豊玉町嵯峨/水崎)

きてねー

対馬狛犬図鑑

～島の聖域の守護者たち～

一般社団法人 対馬観光物産協会

〒817-0021 長崎県対馬市厳原町今屋敷672-1

観光情報館ふれあい処つしま

TEL 0920-52-1566 / FAX 0920-52-1585

<https://www.tsushima-net.org/>

一般社団法人 対馬観光物産協会

■ まえがき

私が対馬の狛犬に魅せられたきっかけは、「対馬の自然と文化 第42集」に掲載された大澤 信さん(元・対馬市島おこし協働隊、現・九州国立博物館 主任研究員)の寄稿でした。

そこには石工・田崎 亀次の生涯と作品、時代背景、職人としての情熱、そして芸術家としての矜持が生み出したデザインや技術の変遷などが綴られています。

それまで何気なく眺めていた狛犬の一体一体に、美術工芸品としての価値や地域性があり、作者がいて、物語もあるのだと、強い印象を受けたのです。

対馬は平安時代の延喜式(927年完成)において、国防また外交の最前線である「辺要」に指定され、朝廷が重視する祭祀の拠点でした。

いまま島内全域にたくさんの神社が点在しますが、それらは多くが集落内にあり(一部例外はありますが)、早朝でも参拝でき、地域の人々によって大切に守られています。

季節や天候に左右されにくい観光資源であり、根強い愛好者もいます。

これまで観光協会の職員として、対馬の山岳や歴史、砲台、神社などのガイドブックを制作してきましたが、パソコンを整理すると、そこには無数の神社の写真があり、狛犬だけでも数百枚もの記録がありました。

狛犬のデザインや材質、台座に刻まれた石工の名や年号を紐解き、物語として紡ぐことができれば、新たな観光コンテンツになるのではないかと――。

そんな直感から、私の「狛犬と石工をめぐる旅」が始まりました。

この拙いハンドブックで伝えられるのは、その魅力のほんの一端に過ぎませんが、これをきっかけに皆様が現地へ足を運び、個性的で不思議な対馬の狛犬たちの世界を肌で感じていただければ、これに勝る喜びはありません。



2026年2月
対馬観光物産協会 エヌ

■ 狛犬の起源と発展

狛犬の起源は、遠くエジプトやメソポタミアに遡るようです。地上最強の生物とされるライオンは、古代トルコやシュメールの女神の傍らでも、聖域の守護獣として崇められていました。

インドでは「シンハー(サンスクリット語)」と呼ばれ、生息していない中国に伝わる際、半ば想像上の動物・神獣「獅子(シーザー)」となりました。

日本へは中国から直接、あるいは朝鮮半島を経て伝来したとされ、当初は左右対称の「獅子」でしたが、非対称を好む日本人の感性により、平安時代頃には「獅子」と「狛犬」に分化したとされています。

もともとは木製で屋内に置かれていましたが、野外に設置されるようになると、耐久性の高い石造りの大型の狛犬が誕生しました。石の産地ではその特性を活かした造形が発展し、備前などの焼き物の産地では陶製の狛犬も作られました。

基本姿勢は「蹲踞(そんぎょ)＝お座り」ですが、江戸時代になると各地で独自の進化を遂げます。玉を抱えるもの、今にも飛びかかりそうにお尻を高く上げるもの、逆立ちするものなど、その姿は実に多彩です。

対馬の江戸時代の狛犬は、関西から移入されたと思われる花崗岩(御影石)製のものが主流でしたが、大正時代に入ると、島内外の石工たちにより多様な狛犬が製作されるようになります。

特に名工・田崎亀次の作品は、大正9年(1920年)の乙宮神社(美津島町緒方)から昭和15年(1940年)の豊崎神社(上対馬町比田勝)まで、一人の職人が20年にわたって磨き上げた技術と感性の変遷を辿ることができる、極めて貴重な事例となっています。



■ 中国の石獅子

日本の狛犬の原型とされるのは中国の石獅子ですが、その姿は、横浜中華街など身近な場所でも見ることができます。

中国の石獅子は、長江を境に大きく二つの系統に分かれ、北側に分布する「北獅」は筋肉質で逞しく、南側の「南獅」は装飾性が豊かでどこか妖しげな容貌をしています。

また、中国との交流が深い沖縄では、中国流の獅子と沖縄独自のシーサー(獅子)、その両方の流れを見ることができます。

狛犬は神社など聖地の守護者のイメージが強いのですが、中国の獅子や沖縄のシーサーは、家やホテル、ビル等の門前に設置され、より生活に密着している印象を受けます。

基本は左右対称で、どちらも口を開けていますが、一方は玉を、もう一方は仔獅子を踏んでいる場合があるなど、細部に見られる違いが興味深いところです。



関帝廟(かんていびょう)と石獅子



媽祖廟(まそびょう)と石獅子



筋骨隆々の「北獅」(白と金)



■ 沖縄のシーサー・狛犬



沖縄・福州園の「南獅」



沖縄・波上宮のシーサー(？)



琉球王・尚氏の墓所・玉陵(たまうどろん)の石獅子群



首里城の狛犬



民家のシーサー

■ 獅子と狛犬

日本で分化が進んだとされる「獅子」と「狛犬」については、一般的に、拝殿に向かって右が獅子、左が狛犬とされます。

口を開けた「阿(あ)」は世界の始まり、口を閉じた「吽(うん)」はその終わりを意味するとされ、以下のような特徴で分類されますが、例外もかなりあります。

獅子と狛犬は、陽と陰、雄と雌など、対立しながらも調和をもたらす象徴的存在として、聖域の入口に鎮座しているのです。



舟志乃久頭神社

所在地： 対馬市上対馬町舟志681

祭神： 神皇座霊神 多久頭魂神

それぞれ特徴が異なる、4組の狛犬と2組の力士像(!)があり、たっぷり楽しむことができます。

下の狛犬は文久2(1862)年のもの。



獅子

配置： 拝殿に向かって右

口の形： 阿(あ)形

角： 無し

耳： 垂れ耳

体色： 黄色または金色

たてがみ： 緑色で巻き毛



狛犬

配置： 拝殿に向かって左

口の形： 吽(うん)形

角： 一本角

耳： 立て耳

体色： 白または銀色

たてがみ： 青色

■ 台座の重要性

狛犬を観察する際、ぜひ注目してほしいのが「台座」です。

そこには奉納者の名前、住所、年号、そして石工の名が刻まれていることがあり、貴重な情報源となります。

石工の名と年号が分かれば、その職人の技術の進化が見えてきます。

そして奉納者の名からは、100年近く前にこの場所で祈りを捧げた人々の想いや、当時の村の情景に思いを馳せることができます。



明治三十九年

対馬國鹿見村

早田全右門

鹿々本神社

(対馬市上県町鹿見126)



石工 尾崎村

有江政雄

昭和十三年

九月九日

太祝詞神社

(対馬市美津島町加志・集落奥)

【注意】

台座の情報が必ずしも正しいとは限りません。例えば、志々伎神社(厳原町小浦)の狛犬は昭和の新しいものなのですが、元の狛犬の奉納年が新しい台座に刻まれています。(元の狛犬と台座は、拝殿前に移されています)

■ 材質

江戸時代、浪花(大阪)狛犬は、加工しやすい砂岩から、より耐久性が高い花崗岩に移行していきます。対馬でもその時期に導入された花崗岩製の狛犬が目立ちますが、明治から昭和にかけては、ふたたび加工しやすい砂岩が利用されるようになります。

浅茅湾に面する大石浦(豊玉町)は良質な砂岩の産地であり、明治期の砲台や狛犬の石材として活用されました。

また、船での輸送が難しい「瓦」も対馬で焼かれていたようです。

妙見神社(対馬市豊玉町唐洲)には瓦製の狛犬があり、台座には製作日などが刻まれていましたが、樹木の繁茂による落下で破損し、判読が難しくなっています。その他、備前焼や、わずか一對ですが高麗青磁の狛犬など、希少な作例も存在します。



志々伎神社(厳原町久田):花崗岩



行相神社(豊玉町田):砂岩



雷命神社(厳原町阿連):備前焼



海祇神社(美津島町島山):瓦(?)

■ 石の産地と狛犬



石の産地であり、そこが舟運の拠点であった場合、そこで製作された狛犬は航路上の各地域へ広がっていきます。

重い石材は陸運には不向きですが、荷物を降ろして重心が上がった船のバラスト(底荷)として石塔や狛犬を利用すれば、船の安定性を確保できます。

石の産地にはもともと優れた採掘・加工技術者があり、そこで製作された個性的な狛犬が、寄港地に広がっていったのでしょう。

■ 代表的な狛犬の産地と石材

岡崎(愛知県) 夏山石・花沢石(花崗岩)

尾道(広島県) 花崗岩

出雲(島根県) 来待石(砂岩)

浪花(大阪・堺) 和泉砂岩

伊予(愛媛県・小豆島) 庵治石(あんじいし。花崗岩)

越前(福井県) 笏谷石(しゃくたにいし。凝灰岩)

小松・白河(福島県/神奈川県) 小松石・白河石(安山岩/凝灰岩)

■ 焼き物の狛犬

備前(岡山県) 備前焼

東濃(岐阜県) 美濃焼

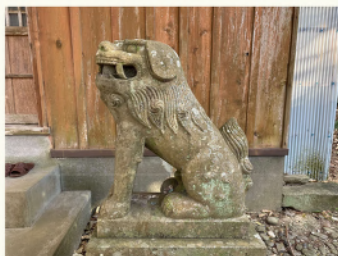
瀬戸(愛知県) 瀬戸焼

■ 狛犬のデザイン その1 蹲踞・玉乗り

対馬で見られる江戸時代の狛犬は、浪花(大阪)の「蹲踞(そんきょ)＝お座り」が多いのですが、尾道(広島)の「玉乗り型」や、出雲(島根)の「構え型」なども見られます。

江戸(関東)・東北など東日本の影響はほとんど見られないようです。

■ 蹲踞(そんきょ)＝お座り 型



もっともオーソドックスな姿勢です。

江戸時代のものから、昭和時代に岡崎(愛知県)で製作されたもの、また近年中国で生産されているタイプまで広く当てはまります。

■ 玉乗り型



大きな丸い玉を抱えるタイプで、尾道(広島県)が発祥とされます。

江戸時代から存在しますが、明治期にブームとなり、北九州から瀬戸内海沿岸にかけて分布していったようです。

■ 狛犬のデザイン その2 構え・その他

戦時中に流行した「護国型」は、逞しい胸筋と浮き出た肋骨が特徴的な威厳ある姿ですが、対馬ではほとんど見られません。

他にも、頭に皿を持つ「河童型」が少数存在しますが、なぜか皿のくぼみがセメントで埋められているなど、対馬ならではの不思議な光景も。

加賀(石川県)に多い「逆立ち型」は、対馬では屋根瓦の装飾として稀に見かける程度で、それも比較的新しいもののようです。

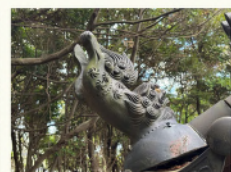
■ 構え型



出雲(島根県)地方で製作された、上半身を低く構え、お尻と尻尾を高く掲げた躍動感あふれる姿の狛犬です。丁寧な細工が施されていますが、石工の名前が刻まれておらず、詳細は不明です。

対馬の石工・田崎亀次は、晩年にこのスタイルを導入します。

■ その他



護国型(写真は昭和47年の岡崎古代型)、皿がある河童型、珍しい逆立ち型など、島内にはバリエーションに富む狛犬がたくさんあります。

■ 石工たち その1

■ 清兵衛(せいべえ)

文政七年(1824年)の作とされる金刀比羅神社の狛犬は、まるで手塚治虫氏の漫画に登場しそうなユーモラスな表情をしています。

台座に「石工 赤間関 清兵衛」の文字が刻まれており、200年以上前、下関(赤間関)にこのように個性的・独創的な職人がいた事実には驚かされます。



金比羅神社 (対馬市厳原町大手橋1079 ※「味処 千両」横)

■ 岩永系

厳原八幡宮をはじめ、各地で目にする「岩永」の名。特徴はなんといっても、くっきりとした「アーモンド型の瞳」です。

見慣れてくると、顔立ちだけで「あ、岩永さんの作品だ」と判別できるようになります。



天道大神神社(厳原町豆酸・龍良山)



妙林神社(厳原町豆酸瀬219)

■ 石工たち その2

■ 有江系

「有江政雄」(昭和13年)の狛犬は、微笑みを浮かべた表情と、丸みを帯びた短い手足が特徴で、全体的に愛らしく、見る人を和ませる造形です。天草からやってきて、兄弟で石工をしていたとのことで、厳原町阿連の雷命神社や美津島町を中心に同型の作品が見られます。



太祝詞神社(対馬市美津島町加志・集落奥)



■ 増田系

「石工 増田寿太郎」の狛犬は、テーブルの脚のようにまっすぐな前脚、ソーセージを思わせる寸胴な体型、上顎が横に広がったワニのような表情が特徴です。根緒・南室などに数点の狛犬がありますが、田崎亀次の初期の作品とほぼ同型で、その関係が気になります。



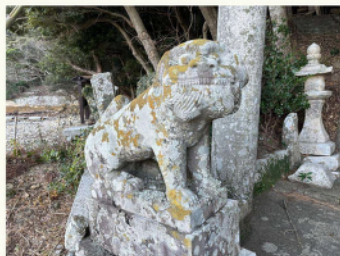
和多都美神社／高倉神社／志々伎神社(美津島町根緒432)



■ 石工たち その3

■ 金原一族

古代山城・金田城のふもと、大吉戸(おおきど)神社にある狛犬の台座には、石工 金原 嘉七(?), 金原 清一、金原 長次郎の名と、明治36年(1893年)の年号が刻まれています。大型で造形も立派ですが、登山・船(シーカヤック)などでしか行くことができません。



大吉戸神社(対馬市美津島町黒瀬515)

■ 木村貫〇郎(〇=次?)、巖原町宮谷 吉木 ※吉

個性豊かな石工たちが台座に名を刻んでいますが、作例が少なく、詳細は不明です。



銀山上神社(巖原町久根田舎507)



豊和多都美神社(巖原町椎根1243)

■ 時代ごとの対馬の狛犬

大正～昭和(戦中)は、これまで紹介してきた石工たちと、これから紹介する田崎亀次が活躍した時代です。対馬においては、昭和27年を最後に石工の名が刻まれた狛犬は姿を消し、規格品の時代を迎えることになります。

江戸時代



(左) 巖原八幡宮(対馬市巖原町中村645-1) 文化四(1807)年正月

(右) 天神多久頭魂神社(上県町佐護西里2864) 文政七(1824)年正月

明治時代



(左) 小牧宿禰神社(峰町三根959番地) 明治29(1896)年11月

(右) 舟志乃久頭神社(上対馬町舟志681) 明治6(1873)年11月

大正時代～



(左) 天道大神神社(巖原町豆酲・龍良山) 昭和27年旧3月

(右) 鵜鶴神社(上県町犬ヶ浦173) 令和3(2021)年3月

■ 石工 田崎 亀次 (たさき かめじ)

対馬に最も多くの足跡を残したのが、名人と称された「田崎 亀次」です。
明治21年(1888年)に生まれ、昭和21年(1946年)に58歳で没するまで、島の北・比田勝から南・豆酲まで、数多くの作品を遺しました。

大正9年(1920年)の乙宮神社(美津島町緒方)を皮切りに、20年にわたって刻まれた彼の作品群からは、一人の石工が辿った試行錯誤と技術の深化が見て取れます。



「まえがき」で紹介した「対馬の自然と文化」の大澤信さんの記事によると、対馬市豊玉町廻(まわり)の「石倉」(「明治四十年」の銘あり)は、亀次の作品と伝えられています。



大正10(1921)年の亀次の狛犬(左)は、同年に奉納された増田寿太郎(右)と酷似しており、二人の間には、師弟や同じ職場といった関係性があったのかもしれない。

■ 田崎 亀次 試行錯誤の時代

増田系から独自の発展を見せ始めた初期の作品は、鼻筋が狭く繊細な加工が施されていました。それゆえに顔の一部が欠損しやすいという弱点がありました。

それが時を経て、次第に肉厚で逞しい造形へと変化していきます。
歯を剥き出しにして唸り声を上げるような迫力あるデザインを経て、晩年には躍動感溢れる「出雲・構え型」へと到達します。



乙宮神社(美津島町緒方213)に大正9(1920)年に奉納された、亀次最古(2026年2月確認時点)の狛犬。「彫刻人 田崎亀次」「世話人 田口種吉」「寄附者 大船越 安増徳郎」。



(左) 胡禄御子神社(上対馬町琴3) 大正15(1926)年旧10月

(右) 國本神社(上県町瀬田1) 昭和2(1927)年2月

大正9～10年はデフォルメされた造形でしたが、大正15年になるとリアルな姿に変わっています。眉・眼が険しく、鼻筋・上顎の幅が狭いため、強度に問題があるのか、この時代の狛犬は欠損がよく見られます。

■ 田崎 亀次 名人への道



(左) 住吉神社(美津島町鶏知1281) 昭和2(1927)年3月



(右) 嶽神社(豊玉町仁位) 昭和6(1931)年1月



(左) 多久頭魂神社(厳原町浅藻) 昭和9(1934)年4月



(右) 行相神社(豊玉町田1058) 昭和13(1938)年旧6月



(左) 金剛院(厳原町豆酏3342) 昭和15(1940)年4月



(右) 豊崎神社(上対馬町比田勝658) 昭和15(1940)年11月

■ 田崎亀次 構え型の謎



豊崎神社(上対馬町比田勝658) 昭和15(1940)年11月

出雲狛犬の「構え型」を取りこんだ亀次の晩年の作品ですが、実は、石工の名が刻まれていない「構え型」が豊崎神社・金剛院以外にも3組あり、亀次の作品なのか、亀次の工房の他の石工のものなのかは不明です。



(左) 乙宮神社(豊玉町糸瀬12番地1) 皇紀2600年記念(昭和15年?)

(中) 嵯峨神社(豊玉町嵯峨330番地1) 昭和15年10月(日支事変帰還記念)

(右) 乙宮神社(美津島町芦浦293番地) 昭和18年11月

■ 個性的な狛犬たち（ユーモラス編）



金比羅神社（対馬市厳原町大手橋1079）アニメ風



入江神社（豊玉町嵯峨624番地4・水崎）ひまわり笑顔

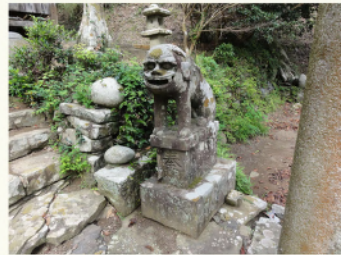


能理刀神社（上対馬町芦見274）ロン毛&あごひげ

■ 個性的な狛犬たち（不気味編）



恵比須神社（美津島町賀谷124-5）怪獣？



乙宮神社／糠嶽神社（豊玉町卯麦449番地）しょんぼりとウヘへ

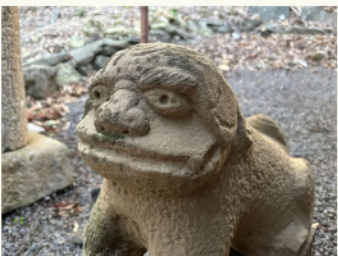


那須加美乃金子神社（峰町志多賀290-2）ニヤニヤとフガフガ

■ 個性的な狛犬たち（不思議編）



銚神社／銚大明神（対馬市峰町吉田）遷座後の廃社に佇む明治の狛犬



那須加美乃金子神社（上対馬町小鹿520）訳ありカップル



海神社（峰町木坂247番地）「構え」ではない出雲型。対馬一の宮の威厳

■ 狛犬をめぐる旅

対馬は、驚くほど神社の密度が高い島です。
長崎県神社庁に登録された約130社に加え、合祀されたものを含めればその数は210社を超えます。さらに漁村の金比羅様や恵比須様、名もなき祠まで数えれば、島全体がひとつの巨大な聖域といっても過言ではありません。
もっとも、すべての神社に狛犬があるわけではなく、地図を頼りに山頂を目指しては空振りになることもあります。
しかし、峰町吉田の「神ノ山」での出会いは格別でした。
社が移転し、静まり返った空間の前に、明治時代の狛犬だけがぽつんと取り残されていたのです。
守るべき聖地を失ってもなお、いつか来る参拝者を待ち続けるようなその佇まいに、不思議な感動を覚えました。

かつて狛犬はすべて、石工の手による世界にひとつだけの一点ものでした。しかし、愛知県岡崎市に始まった量産化の波は、やがて中国産の白い花崗岩による規格品へと姿を変え、今や日本中の狛犬が「どこかで見たことがある姿」に変わっています。
それは効率やコストを重視し、全国的に平板化してしまった日本の姿と重なっているように思えます。
対馬の石工たちは、島民の切実な祈りを、独自の造形として石に刻みこみました。
石工や奉納者が時間の果てに去っても、この島で暮らした人々の痕跡は、確かにそこに息づいているのです。
深い森や無人島、あるいは集落の片隅に、未踏の狛犬がいて、島民の祈りを静かに伝えているような気がします。
狛犬をめぐる旅は、まだしばらく続きそうです。



「エヌの世界」
対馬の狛犬情報（画像、Googleマップ等）
110社136組（272体）2026年2月時点